

デジタル活用共生社会実現会議
ICT地域コミュニティ創造部会（第2回）

1 日時

平成31年1月18日（金）10時00分～12時00分

2 場所

総務省 10階 総務省第一会議室

3 出席者

（1）構成員（敬称略）

安念潤司部会長、上村忠男構成員、紀伊肇構成員、近藤則子構成員、澁谷年史構成員、阿南健太郎構成員（鈴木構成員代理）、瀬戸りか構成員、藤咲宏臣構成員、松岡萬里野構成員、御手洗裕己構成員

（2）オブザーバー

経済産業省情報産業課、文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課、文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課情報教育振興室、総務省地域通信振興課

（3）プレゼンター

回谷信吾（株式会社ボイスタート）、森拓生（一般財団法人家電製品協会認定センター）、岡田吉弘（MIHARAプログラミング教育推進協議会）

（4）総務省

安藤英作大臣官房総括審議官、赤澤公省情報流通行政局審議官、犬童周作情報流通振興課長

4 議事要旨

（1）配付資料確認

（2）プレゼンテーション（デジタル活用支援員関係）

（ア）株式会社ボイスタート回谷氏より資料2-1に基づき、デジタル活用支援員の

活動のあり方について説明が行われ、以下の質疑が行われた。

【澁谷構成員】最後のポイントなのですが、国としての取り組みである以上、ボランティアに頼るべきではなく云々と、全くそのとおриだと思ふのです。国での活動費用の部分がございませうけれども、例えば御社の場合はフォアプロフィットの会社でいらっしやいますよね。ですから、将来的にはこの活動を通してどういった形でのレベニューを考へておられるのかということ、ちょっと気になったものから。

【ボイスタート（回谷）】我々も確かに民間事業者でございませうので、基本的には今はご利用者の方から月額という形でいただくということ、を想定しておられます。ただ、やはりこれが月に3,000円も5,000円もということになると、なかなか皆さんの負担も重過ぎるでしょうから、我々としては1人1人の単位ではなるべく低価格で、そのかわり、多くの方に使っていただくことで何とか事業として成立させたいと思っております。

【松岡構成員】支援員の研修は、実際にはどういう形でされているのでしょうか。

【ボイスタート（回谷）】今回は実証実験であり期間もなかったものから、このセカンドライフかまくら様のほうには、やはりある程度スマートフォンを使いこなされているシニアの方、元々そういったICT業界で働かれていた方も当然おられますので、今回はもう既にそういった素養をお持ちの方にお願いをさせていただいたというのが現状でございませう。

【安念部会長】しかし、それはそれで大切なことではございませうね。既存の支援。

【竹内（和）構成員】とても参考になりました。また後でまとめさせてもらいます。

【安念部会長】私から1つ伺いたい。どうでもいつまらないことなのですが、先ほどのサービスの内容というのを、幾つかの分野を示していただきましたが、健康系の中に般若心経が出てくるというのはどういう考へ方なのでしょうか。

【ボイスタート（回谷）】我々は、やはり声を出すこと自体も非常に重要だと思っております。ただ、もちろんボイストレーニングも入れているのですが、なかなか楽しみと言いますか、そもそもそういったことに興味・関心を持っていただくという意味で言うと、全員が全員、般若心経ということは難しいと思っておりますが、逆に言うとそういったものに関心がある方にとっては非常によいコンテンツに、その中で主の祈りのキリスト教の方からお叱りを受けまして、キリスト教のこと

もお願いしますと叱られましたので、今は2つそろえております。

【安念部会長】ありがとうございます。確かに、歌唱とか朗読というのは心身によろしいですね。

(イ) 一般財団法人家電製品協会認定センター森氏より資料2-2に基づき、デジタル活用支援員へのサポートについて説明が行われ、以下の質疑が行われた。

【藤咲構成員】大変示唆に富んだご報告、どうもありがとうございました。ご提案の多くはそのとおりと感じております。スライド6ページ目の資格保有者の業種の中に、その他という方が14%ぐらいおられまして、これらの方々というのは、どのような方なのかということをお聞きしたいのです。この資格をとる方は、ほとんどが家電業界の方だろうと思うのですが、そもそもこの資格をとるために職歴あるいは学歴というか、前提としてその業界にいないといけないのか、あるいは他分野の人も興味・関心があればチャレンジできるのかといったところを伺いたいのです。先ほどのご報告のようなことから考えると、逆に私どものような福祉分野の、例えば在宅介護などに関係しているようなところの職員などが、このスマートマスターなどのスキルを得たら、さらに活躍する幅を広げられるかもしれないと思ったりするところもありまして、特にその他の中に入ってくる中にはどのような方が現状でもおられるのかということをお聞きしたいと思います。

【家電製品協会（森）】まず、私ども、資格を取得するための前提資格はございません。学生さんでも、職業のない方でも、ご自由にご受験をいただけるものでございます。ご質問の、その他の職種でございますけれども、この分類は資格取得時の自己申告に基づくものでございまして、ではその他の中で一番多いものは何かと言いますと、学生さんなんです。従いまして、申しわけないのですが、今現在、どの職種、職業についてらっしゃるのかがフォローし切れていないというのが、その他の中で一番多く。学生さんと言いましても、4年制の大学ではございまして、主に専門学校でのご卒業ですね。ご案内のとおり、何らかの資格をおとりになって、すぐさま職業に生かそうという狙いから、専門学校の生徒様が多数ご受験をいただいている。それに伴って、学校の先生もたくさんご受験をいただいています。もう少しつけ加えますと、最近増えておりますのが、物流業者様でございます。これは何かと言うと、ああいう物流の仕事の延長線上で、家電製品をお

取り扱いになる。引っ越しの際にエアコンを取り外したり、取り付けたりという作業をなさる職業性が出ておりますので、物流会社の社員様も多くご受験をいただいていると。主だったところはそんなところかと存じます。

【近藤構成員】すばらしい内容だと思いますが、そうすると、この資格というのは、一部の就職に有利な資格みたいな意味でして、例えばフリーランスでそういう独立した職種があるというイメージで捉えなくていいわけですね。

【家電製品協会(森)】おっしゃるとおりでございます。先ほども言いましたように、学生時代からお取りになるというケースもございますけれども、多くは家電関連の法人様が会社の人材育成施策としてこの資格制度を選択し、社員に奨励をしていると、そういうケースが非常に多うございます。

【安念部会長】私から1点伺いたいのですが、資格認定ですけれども、今伺っていますと、受験者の数もさることながら、教材の作成、教育、試験問題、さらにはフォローアップと、相当のマンパワーを要することのように思うのですが、いかがですか。相当の人材を、御協会を抱えてらっしゃるわけですか。

【家電製品協会(森)】私どもの協会は総勢にして50名に満たないもので、私どもの認定センターというセクションでございますが、これは10名そこそこのメンバーです。では、そのいわゆる知識集約の作業はどうしているのかと言いますと、主に私どもの組織を編成している家電メーカー、家電メーカーの専門員の協力を得て、手弁当で委員会等に参画をいただいて、テキストづくりや試験問題づくりをしております。ただ、補足いたしますと、スマートマスターというのが家づくりであるとか暮らしのサポートという、ちょっと家電以外の領域も加わっておりますので、そこは建築家の先生方などにもご参画をいただいていると、そういう構成部隊でやってございます。

【安念部会長】ハウスメーカーさんなんかも関与していらっしゃるわけですか。

【家電製品協会(森)】固有名詞は出せませんが、協力をいただいております。

【安念部会長】わかりました。ありがとうございます。

【竹内(和)構成員】質問はないですけれども、鎌倉の例とか、今の話とか、それから社会福祉、そういうところが実証に協力しながら個別にやるのではなくて、やっていくことで非常にいいものができるのではないかなと聞いております。

【犬童課長】お二方のプレゼン、すごく参考になりまして。ボイスタートさんの実

証で、鎌倉市さんでシニア13名の方にサポーターをお願いされているということなのですが、13名の方で、こういう家電アドバイザーとか、こういった資格を持っている方というのはおわかりでしょうか。

【ボイスタート（回谷）】この13名の中で、我々ちょっとそこまで勉強不足で確認できていなかったのですが、特にご自身で私は持っていますという方は、今回は残念ながらおられなかったようなので、次、我々が今後の対応、事業の推進の中では、そういった資格の保有者というものを視野に入れたいなと思いました。

【犬童課長】民生委員さんとか、あるいは先ほどの地域ケアセンターの方に資格をとってもらってというご意見があったのですが、おそらくそういう方向が望ましいかなとは思っておりますけれども、そうすると、自治体さんとか市区町村さんとか、この辺の関与というのもある程度やはり入れていかなければいけないのではないかという気がするのですが、そのあたりのご意見等あれば、後ほどでも結構ですけれども。

【安念部会長】僕もそれはちょっと感じたところです。お二方、あるいは実際の関係者の方でも結構なのですが、何か現時点でご意見がある方、ご意見ください。

【ボイスタート（回谷）】今回、鎌倉市でさせていただく中で、我々としてはやはり鎌倉市のご協力が必要不可欠だと感じておりました。それは、高齢者の方々も昨今さまざまな詐欺とかいろいろなものがある中で、やはり新たなものに対する不信感、警戒感というのは非常にお持ちですし、それはもう当然のことですから、そういった中で自治体のご協力を得られたということは、信頼の意味では我々としては非常にありがたかったですし、我々も自治体、特にこういったことというのはコミュニティに貢献したいというところもありましたので、我々としては必要不可欠なことだと感じております。

【安念部会長】森さんはいかがですか。

【家電製品協会（森）】それはそのとおりです。

【安念部会長】今日、飛騨市から御手洗さんがいらしている。実際のコミットというのが、お金も含めてだけれども、やはり要請される局面が出てくるだろうということで、どう思われますか。

【御手洗構成員】民間だけでやろうとしたときに、果たしてここにたどり着くかどうかというところがまず不安ですね。なので、自治体のほうは、こういうのがあ

るのでやってみませんかというのをどこかで投げかけないと、やはり始まらないのだらうな、そもそも、というのは思っています。

【安念部会長】それは何となく、直感的にはごもっともな感じがするな。

【犬童課長】今日、先ほどのご意見伺った中で、確かに信頼性というのがまず段階であるのですけれども、民生委員さんとか社会福祉協議会さんとか、いろいろなところと連携するというのが、ICTの使い方ではなくて、困りごととおっしゃったので、多分、ICT機器を教えに行ったときに、それ以外のことを聞かれると思うのです。そうすると、地域で高齢者の方の支援活動をやっている方との連携というのが広く行われるべきだと。そうでなければ、この制度は根付かないと思いますね。そのあたりを、もう少し自治体さんも積極的に関与したほうがいいのかどうかという面もあるのではないかと思っています。また、後ほど意見がありましたら。

(3) プレゼンテーション（地域ICTクラブ関係）

(ア) 坂本補佐より資料2-3に基づき、地域ICTクラブに関するガイドライン案について説明が行われた。

(イ) MIHARAプログラミング教育推進協議会より資料2-4に基づき、商店街連携モデルについて説明が行われ、以下の質疑が行われた。

【鈴木構成員代理（阿南）】お伺いしたいことが2点あるのですけれども、業務改善を目指すということで、それがテーマになっているということですのでけれども、具体的な業務改善の中身と、それをどういうふうに子供に伝えたのかというのがポイントなのかなと思いましたので、そこをお伺いしたいと思います。もう1つは、発達障害というテーマが出てまいりましたけれども、非常に親和性もある話だと思いますが、苦労もあったのかなというところで、少し、どういうふうに展開されたのかを教えていただければと思います。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】実際に子供たちが店舗に行くと、その店舗の従業員からいろいろなヒアリングをしてきました。その中で、具体的な話で言いますと、ホテルの受付には朝食の時間とか温泉の時間を尋ねる質問が多いのだというようなことがありまして、そうであるならば、ホテルのフロントでチェックインをするときに、ロボットがそれについてアナウンスをして

くれることで、その質問が実際に減ったというようなことがありました。そのような形で、ホテルについてはそういうことが言えます。あるいは、お土産屋さんでは結構外国人も多くて、最近、三原市も観光に力を入れておりますので、来てくれるのですけれども、やはりお土産屋のおばちゃんというのはちょっと英語とか中国語は苦手なのですが、ロボホンであれば英語も中国語もしゃべれますので、それはグーグル翻訳を使って多言語に対応するということなののですけれども、実際にそういうことをやりますと、中国語で商品説明を聞いて、その商品を買っていったというようなこともあったり、そういう具体的な話がございます。発達障害の子についての展開についてですけれども、なかなか発達障害向けのプログラミング講座をやりますということは大きく出せないということがあって、人集めに結構苦労をして、三原市教育委員会のほうに相談をしましたところ、三原市教育委員会で定期的にやっている校長会というのがあるのですけれども、三原市は大体20校の小学校と10校の中学校の30校ぐらいしかないので、その30人が一同に会していろいろな議論をする場があるのですが、そこで今回のこの取り組みをプレゼンさせていただきまして、そうすると、校長先生はやはり現場のことをよく知っているので、この子だったらいけるかなと、この子だったら向いているだろうということがすぐわかったみたいで、先生から直接お声がけをいただいて参加者を募ってきたというような取り組みでやってきました。講座の内容でいきますと、結構、子供の特性によっても講座が成り立たないみたいなこともあります。要は、いきなり鬼ごっこを始めたりというようなこともあったり、そういうこともあるので、私たちは県立広島大学に三原キャンパスというのがあるのですが、その作業療法学科の先生とか、学生さんに参画していただきまして、どういうふうになんかいろいろな仕掛けをつくっているか、例えば、この扉には入りませんというのは、貼紙を張っておくだけで子どもは入らないのですよね。そういうようなちょっとした工夫をしたりとか、あとは講座が始まる時に、今日はこういう教材があるよと、ぱっと並べて、ロボホンだけじゃなくていろいろな教材があるのですが、それを子供たちに選んでもらって、自分がやりたいと選んだものだったら、やっぱり集中力が続くので、そういうやり方をやったりして、いろいろな紆余曲折がありながらですけれども、参加してくれた子供たちはすごく楽しんでプログラミングを学べたかなと思っています。

【安念部会長】私から少し伺います。この種のクラブというのは、創業することと、それを守っていくと言うか、要するにオーガナイズすることと、サステインすること、どちらも大切なのですが、伺っていると、別にお世辞ではないのですけども、岡田さんが持っておられるオーガナイザーとしての能力というのは大変なものだというふうに、特に感服をいたしたのですけれども、立ち入ったことを伺って恐縮ですけども、そういう能力はどこで養われたのですか。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】難しい質問ですね。でも、やっぱり何と言いますか、三原で、私が三原出身だということもあって、Uターンで昨年4月に戻ったのですけれども、そういうのも、地域の人からすると、よく帰ってきたねというのがあって、そういう意味では、結構いろいろな人が協力してもらいやすいタイミングがあったということもあるのかなと思っています。

【安念部会長】謙虚でいらっしゃることも1つの大きな才能ですな。

【近藤構成員】素晴らしいですね。

【松岡構成員】三原市の行政マンとしては何人ぐらいかかわったのでしょうか。このプログラムに。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】メインで関わってくれたのは1人です。その人がかなり熱心にいろいろ動いてくれて、その人はまたその半年前にやったフォーラムで、自ら来てくれた人で。そういう1人です。

【松岡構成員】行政職員というのは、それほどたくさんの人ではかかわったわけではないということですかね。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】いや、その1人が中心にコミットしてくれたのですが、例えば教育委員会でという話になると、その人が調整をしてくれて、教育何とか課長さんとお会いして、その人が動いてくれるとか、あるいはそういう、今回商店街も巻き込んでおりますので、経済部とかの調整が必要であるならば、その人が調整をしてくれて、打ち合わせをして、それで動いてくれるとか、必要なタイミングでいろいろな方が動いてくれるというような形で進めています。

【安念部会長】先ほど拝見した組織図によれば、中心となって動き回ってくださる方は1人かもしれないけれども、特別顧問に副市長さんがもう入っておられたり、各部長さんも入っておられたりして、実はかなり広範に市役所のコミットメント

があるのではないですか。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】おっしゃるとおりです。本当にそうです。やっぱり副市長が特別顧問というポジションに入っていることで、その担当者もすごく動きやすいということも言ってくれていて、そういういろいろな部署との連携という意味では非常にやりやすかったですし、そういうのはありますね。

【竹内（和）構成員】私、中学校の教員を20年してしまして、市教の指導主事もしていたのですね。だから、すごくこういうことをやる時に、実は自治体側は難しいですね。なぜなのか人は上に上がっていくところがあるのです。例えば、私が指導主事で、係長がいて、課長がいて、順番に上がって行って、教育長がオーケーして、市長がオーケーしないと動かないので、そういう意味で言うと、先ほどおっしゃった総務省のお墨付きというのが非常に重要だろうなというのがわかる。それが1点です。もう1つは、これは小学生が前面に出ている取り組みなのですが、これは非常にいいのですけれども、なぜ小学生なのかというのが1つと、もっと具体的に言うと、高校生とか中学生とか、もっと言うと地元の大学生とかが主体になってもいいのではないかなという感じがずっとしたのですけれども、普通でしたら中学生を前面に、まあ、かわいいのがいいのだけれども、順番的に言えば高校生かなというのと、あとは小学生をどういう時間で確保したのか、何か前原小学校という名前が出てきたのですけれども、多分、その小学校の先生がおもしろがったから、地元の小学生かと思うのですけれども、そのあたりの小学生を使った意味と、その小学生のどういう時間を利用したか、そのあたりを少し伺えればと思います。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】なぜ小学生か。今回、小学生の中でも、5年生・6年生の高学年を対象にしております。要は、かなりいろいろな商店に設置する上でコミュニケーション能力とかも必要なもので、そのぐらいの学年じゃないと難しいかなということも思っただけの取り組みなのですけれども、なぜ小学生かですか。あまり深く考えていなかったというのが正直なところですが、小学校でプログラミング教育が必修化されるとかという流れもやはりあるので、というところですね。

【安念部会長】あと、特定の小学校にコミットしていただいたというのが、どうい

う。応援というか、支援というのがおありなのですか。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】特定の小学校にコミット。すみません。私の説明が悪かったですが、前原小学校は東京都の小学校で、その校長先生、松田孝先生とつながりがあって、三原を応援してくれているというところですよ。

【安念部会長】なるほど。そういうことなのですね。

【竹内（和）構成員】では、小学生が何名ぐらい、どういう子たちがどこに集まってどうしたかということまでが活動だと思うのですが、そこまでのご理解はどうですか。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】小学生・中学生を対象にしているのですが、8月と10月にそれぞれ1回ずつ体験講座をやるのですが、それがそれぞれ40名ずつ集まりました。合計80名集まりました。その80名を対象にシリーズ講座、これは3回やるのですが、その3回で商店街のところをみっちりやるということなのですが、その80名中28名が参加してくれました。その28名がそれぞれ7つのロボホンのプログラムチームに分かれて、プログラムをつくるというようなことをやりました。

【竹内（和）構成員】そうすると、どこかの授業ではなくて、土・日とかにどこかの場所に、会場に集めてやったということですか。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】そうです。全部日曜日に開催しています。

【竹内（和）構成員】普通に応募してきた方が、保護者が連れてきてそこでやるという形ですね。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】そうですね。保護者とか、自分で。学校にチラシを配っていますので、それを見て参加したいという子が来てくれています。

【竹内（和）構成員】素晴らしい取り組みですね。

【安念部会長】ありがとうございました。

（4）意見交換

【澁谷構成員】本当に素晴らしいプログラムだと思います。特にこの形で地域のいわ

ゆるICTの能力というのは底上げしていくというのは、本当に長い目で見ると非常にいいことになると思います。その上で2つコメントと言うか質問があるのですけれども、1つはコメントなのですけれども、やはり安念座長もおっしゃったように、かなりこれはオーガナイザーの能力に依存するところがあって、人を得ないと難しいのだろうなということで、この辺を全国展開とか、いろいろなところに展開するに当たっては、その辺をどういうふう考えたらいいかということが1つ。

それからもう1つは、仮にこれが最終目的として三原市をアジアのシリコンバレーにするということであるとするならば、おそらく、私も実はシリコンバレーとボストンぐらいしか知らないのですけれども、あの辺がああいうふうになった理由は、必ずしも若いときからICT教育をしていったからではなくて、例えば一流の大学が集まっているとか、それからその中にとんがった人がいて、大体、一流の大学をやめた人が多いじゃないですか。

もう1つは、それを支援する、特にお金の面で。私が口を開くといつもお金のお話になっちゃうのですけれども、それがあったからだと思うのです。これは、最後のほうで起業を促すためのバリュープロポジション・キャンパスというのがあって、これはある意味で、シリコンバレー等とは違った道で持っていこうということだと思うのですけれども、これはどういうことなのか少しわかりにくいのと、それからもう1つは、どうしてもお金というのはないと起業、起業してそれが成功するところにはならないと思う。その辺の手当てはどういうふう考えたらいいのかなという。

【安念部会長】 とりあえず、岡田さんから何かコメントがありましたらお願いします。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会（岡田）】 まず、全国展開をどう考えていくかというところですが、私たちの今回のいろいろなノウハウはとことん提供をさせていただきたいと思います。やはりオーガナイザー、人がいなければならぬというのは、これは間違いなくそうだと思います。私は別に他の地域に行っても、今回三原でやったことがそのとおりにできるかと言うと、結構時間がかかると思います。このスピード感でやるという意味では、三原でやれたというのは大きかったと思っています。ですから、全国展開。いや、そこはまた一緒に考えてもらえたらありがたくて、いろいろとご指導いただきたい面でもあります。私にとっても。

【安念部会長】あと、これも、私も大変気になるところなのですが、別に岡田さんだけにお答えいただく必要はないのだけれども、やはりお金って、サステインさせるためにはどうしても必要ですよ。そういうファイナンスの面について、やはり何か、三原市さんに独特のご事情みたいなものはありますか。特に好条件であったとか、そういうようなことはございますか。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会(岡田)】例えば、今回の組織の中にも、上のほうを見ていただくと、タケウチ建設という会社が入っていて、あれは結構不思議に思う方が多いのですけれども、タケウチ建設の社長さんとかは、すごくICT教育とか人づくりに関心があって、ビジネスコンテストを今すぐやれということをおっしゃるのですよね。金は俺が出すと。そういうような方もいらっしゃるんで、そういう人たちをうまく巻き込んでいって、実際に資金を出すというようなところまで持っていくというのは、ロードマップとしては描いてはいます。

【安念部会長】わかりました。

【瀬戸構成員】NTTの瀬戸です。今、ここに呼ばれたのは、おそらく女性のIoT、IoTを普及する女性をつくるという形で、今、東京で2年目、広島でやっていて、次、鹿児島でやろうとしています。東京は50社ぐらいの企業に入っていて、広島は20社ぐらいかなというところなのですけれども、先ほどからお話を聞いていて、やはり継続するにはお金というか、地域でという意味で言うと、企業の協力がやはりとても必要になってきます。私が今回苦労したのも、企業を集めるところが一番苦労しました。女性は結構、かなり続けたいとか言うのですけれども、企業のほうがなかなか出してくれないのですね。デザインガールという施策なのですが、デザインガールも資格などが欲しいとか言われています。先ほどの家電協会のところとかであれば、家電協会さんで、その資格を取ると、おそらく1人でも多くなると、その社員は1枚増えたりとか、わからないのですけれども、給料が増えたりする仕組みがあると思うのです。

今回のデザインガールは、実はくるみに連携してほしいとか思ったり、例えばくるみを取った人だったら、IoTの国のプロジェクトにちょっとポイントが加算されるとか、そういうのがあります。だから、そこと連携したいと思っていたのですけれども、今回、デジタル活性化支援も、何かそういう形で国が、その企業は何人か出ているよと。じゃあ、この企業はIoTのプロジェクトをやるときに

ちょっとポイント加算とか、そういうのがあるとすごくうれしいなと思いました。

【安念部会長】それは考えられる話ですね。一般的にアイデアとしてはあり得ない話ではないですね。ありがとうございました。

【上村構成員】ソフト面と、それからハード面と両方がうまくマッチしたので、すごくいい例、いい成功例ではないかと私は感心していました。それらの中で、学校の子供を使うときに、一番気をつけなくてはいけないのは、学校の校長が一番手を出しかねるのが、やはり事故なのですよ。したがって、小さい小学生などだと、やっぱり往復の、集まるときの交通手段と言うか、その辺で例えば学校の、それからそういうコンピュータを扱うのにかなり堪能な方がいると、校長もオーケーしているのだから、市も応援しているのだからというので、進んでいきやすいですよ。その辺のところも、学校の内部のつながりの部分と、それから保護者との関係、そして地域の自治会とかそういった方との関係とが一番厳しい部分があったのではないかと思います。そういった意味で、その事故への対応とか、そういったことも何かされていたのでしょうか。

【MIHARAプログラミング教育推進協議会(岡田)】そういう事故への対応というお答えになっているかはわからないのですが、イベント保険は必ずかけるようにしておりました。例えば、子供たちが店舗にヒアリングに実際に出ていくのですけれども、その間に事故をしてしまったら心配だということもあって、そういう危険に対して保険はかけておりました。大事なことだと思っています。

【松岡構成員】全体的にですけれども、私も自分たちの組織でどうかかわりができるかを考えてきたのですが、やはり、それぞれの自治体が動かないとこれはうまくいかないだろうと思っています。それで、私たちは消費者団体とのコミュニケーションをしているわけですが、皆地方は特に高齢化しているのです。要するに高齢者としての学ぶ役にならざるを得ないというか、そちらのほうでいろいろな協力ができるのではないかなと思います。具体的には、自治体に対して、総務省がバックアップしているということを明確にしていきたいのと、それから消費者団体も地元では地元の自治体との連携というのを結構しておりますので、そういう中で参画していくということを、私どものほうからも推奨するような情報提供をしていきたいなと思っています。その地元で、今まで消費者団体として活動してきた人たちが多く、口コミの力はかなりあると思いますから、そういう参加者

を募ったり、横の連携をとったりということに、結構お役に立つのではないかなという気がしてきましたし、また、それぞれの消費者団体の会員さんも、自分たちに非常にメリットのあることですので、うまく協調できるようにしていけたらなとちよっと思いましたので、よろしく願います。

家製協さんの動きというのは、本当にもっと地域に出てきていただきたいという気がしました。よろしく願います。

【安念部会長】そこでちょっと私も森さんに伺いたいのですが、もちろんそちらでやってらっしゃる認定制度というのは、何も地域ICTクラブの人材を生み出すために始められたわけではないから、それはそれでももちろんよろしいのですけれども、相当、地域ICTクラブのメンターとか、あるいはオルグとか、そういうのにもかかわっていただけるような能力の持ち主の方を輩出しておられるように伺ったのですけれども、そちらの方面での発展可能性などはございますか。

【家電製品協会（森）】人材の能力的には、今ご案内のとおり家電製品と言いましてもコンピュータベースになっていますので、コンピュータ理解がないとなかなか顧客対応もできない、そこは問題なかならうと思います。ただ、これは私どもがその方々を雇用しているわけでも指示命令しているわけでもありませんので、予断を挟むわけにはいきませんが、彼らのビジネススタイルというのは、地域顧客の囲い込みというのが非常に重要な課題になります。したがって、お客様に対して利便性を提供する、それで自分たちの顧客になっていただくと、このつながりをつくっていきたいという思いは間違いなくあると思いますので、そういう意味では、具体的なペイメントというよりも、むしろ制度運用上のレギュレーションの問題、例えば、この受講者相手に商売をしてはいけないというようなレギュレーションを組まれてしまいますと、完全にそっぽを向くだろうなど。

【安念部会長】それはそうでしょうね。

【家電製品協会（森）】その折り合いを、これはモラルの問題も絡んでまいりますので、非常に難しい設定になるのかなというような気がしております。

【安念部会長】それは当たり前ですね。一切商売をしてはいけませんというのでは企業のコミットメントは無理に決まっていますよね。ですから、将来の顧客なのだという下心を持ちつつも、しかしスマートにコミットする方法はないかということですね。

犬童さん、僕が何うのもなんですけれども、この地域ICTクラブのガイドラインをつくるに当たって、例えば、今の段階で固める必要などは全然ないのだけでも、何かしら総務省によるアプルーバルと言うのか、先ほどからずっと出ていたお墨付きという言葉がありますけれども、そういうものがどこかに入ってくるような、そういうイメージでお考えですか。それとも、まさに地域で自生的にというか、もこもこっと立ち上がってくるという、そんな感じなのですか。

【犬童課長】 今回、実証実験も三原市さん以外に23やっておりますけれども、やはり地域差が相当ありまして、やり方、それから目的も結構ばらばらです。そういった中で、統一的な総務省のコミットというか関与というのをどうつくっていくかというのは1つの課題だと思っております、それをどう位置づけていくかというのはなかなか難しいのですが。ただ、検討に値するかなと思っておりますので、考えたいと思います。

【瀬戸構成員】 自治体さんが関与していただけると本当にありがたいのが、その企業が集まってくるというところなのですけれども、広島でも県と市と一緒にやっています。お願いは、やはり県で、企業に応援してもらおうとすると、やはり広島の本社は広島市にあるので、例えば呉市でやろうとすると、呉市の企業だけでやるというのは難しいということになると、やはり県と市と両方応援してくれる、県とか都道府県が応援してくれる仕組みにしてほしいのですけれども、なかなかそこは、私も広島を口説くときに、県と市と別々に何回もアプローチして行ったのですけれども、県に言ったら市に言ってくれるわけでもなくて、市に言ったら県に言ってくれるわけでもなくて、そこがきゅっちゃんとやってくれるとすごくいいなと思えました。

【安念部会長】 わかりました。それもそうですね。ありがとうございます。

特に高齢者の方にアウトリーチする場合、心理的なバリアをどう克服していくかというのは大変難しい問題としてあるし、似たような問題は、障害をお持ちの、年齢層問わず、お子さんであれ何であれ、そういう方にリーチしていくときにも同じような問題があるのではなからうかと思うのです。特に、地域ICTクラブの場合は、ICTの力で障害を持った方との溝をできるだけ埋めていくことをしようというのが、これは1つの重要な課題だと私は認識しておりますので、その点はずっとテークノートしていかなければいけないと思うのです。高齢者の方、回谷さんがお

っしやるように、自分でも使ってみたいのだけれども、やはり何か面倒だとか、不安だとかといったような、知的なと言うよりは心理的なバリアが非常に高いのではないかと想像するの。そういうものを解凍していくと言うのか、下げていくには、何か教えるという態度ではない態度で接するのが本当に大切でしょうね。この点で何かお気づきのことがあったらお教えいただけるとありがたいのですが。

【ボイスタート(回谷)】私のほうでの資料をもう一度見ていただければと思いますが、資料上のページが11、真ん中の下のほうに11とありますが、やはり皆さん、心理的なバリアの中でやはり難しいとか、何か触るととんでもないことになってしまうのではないとか、壊れるんじゃないか、そういった思いを皆さんお持ちだと思っています。もともとこういうICT機器の登場順というのは、パソコンが出て、スマホが出て、今スマートスピーカーみたいなものが出てきましたと。ただ、これって難易度もこの順なのですよね。実は、パソコンはやはり非常に一番難しくて、スマホはらくらくホンとかありますから、少しあれですが、それでも高齢者の方は難しい。実は、シニア世代の導入順としては、我々ちょっと感じているのは、やはり声だけというのが相当ハードルが下がる。スピーカーだけなので、壊れるという心配をあまり皆さん持つ必要がないというのがおわかりいただくので、我々としてはスマートスピーカーが入り口になって、その先に、やはり音声だけなので不便さも当然あるのですね。そうすると、スマートスピーカーは使えるようになったけれども、やはりこういうのを画像で見たいねということに対して、スマートフォンをちょっと使ってみようかなと思われるとか。その先にはもっと、写真をもっともっと加工したいなとか、こういった、実は順番というのが、登場順とは逆ということを、今となっては考えてもいいのではないかなというのは、我々ちょっと考えているところですね。

あと、もう1点が、周りで聞けない。自分がこう頑張ってチャレンジしても、誰に聞いたらいいのだろうというのはまさにあるので、そういった意味では、今回の取り組み、デジタル活用支援員という方がわりと身近におられて、ちょっと何かあったら、ああ、あの人に聞けばというのがあるということは、非常に大きな障害を崩すきっかけになると思っていますので、その2点が我々としては考えております。

【竹内(和) 構成員】とてもよかったと、いい取り組みだと思います。今回、三原とか鎌倉とか、いろいろなところの活動をお聞きしたのですけれども、それを共有す

るようなそういう会というのは、例えば三原が弱いところに鎌倉の長所を取り入れるとか、そういうところにこの会議のやっていく意義があるなと思いました。

特に私が思ったのは、例えば三原で小学生を前面に出すときに、僕はすごく直感するのですけれども、小学生を前に出すと、商店街の方も、いいと言わざると得ませんよね。

そういう流れはすごくいいなと思いますし、鎌倉の場合は、地域の方が出ていくときに、地域の自分の仲間がいると、いいと言わざると得ませんよね。だから、そのあたりのことが、オーガナイザーとしてのすごくうまいところだなと思います。その辺の知見が多分一番重要で、同じものをやっても、先ほど小学生を選んだことに特に意味はないと言ったけれど、多分すごく意味を持っていられたと思うのですよね。そのあたりのことが1つ。

それと、高齢者は実は非常に能力が高い方も多くて、私の母親が82歳なのですが、L I N Eを使ってアメリカの妹と毎日しゃべっているのですよね。だから、やはりそのあたりを言うのですけれども、説明するときに、僕がアサインしろとかアプルーバルをとか言っていると、もうかあっと怒ってしまうのですよね。これは、各県の校長会の方々とお話するときでも、彼らは片仮名が嫌いなのです。だから、O J Tというのは一緒にやってみるとか、彼らがわかるような、彼らが怒らない形、彼らが取っつきやすい形でやっていくのが実は非常に大きなノウハウではないかなと、今日、聞いていて思いました。

【安念部会長】 活発にご議論いただいてありがとうございました。

坂本さんから先ほどガイドラインのご説明がありましたが、いずれにせよ、大きく言えばやはりクラブを立ち上げ、持続していくと、そのためにはどうしたらいいのかというお話であったと思います。なるほど、皆がいいと言わざると得ない手を使うというのは、そのとおりでななと思いましたね。これはオルグにおいても、ファイナンスにおいても、決定的に重要なことだということを痛感いたしました。

瀬戸さんをはじめ、何人かの方々から総務省とか自治体といった公的主体のかかわり方がどうあるべきかというのは非常に重要な問題であるということをご指摘いただきましたので、これにもよく留意をしておかなければならないと思います。

それと、多分密接不可分なのですが、澁谷さんを中心として何人かの方々が、やはりファイナンスというのを考えないでは、それはサステインできないぞという、

極めてごもっともなご発言があったし、また、企業を巻き込もうとすれば、その努力がレベニューにつながらなければ無理だよねというご発言もありました。そのあたりを、何と言うのか、ぎとぎとした感じなしに、スマートに格好よくやりたいと思いますね。レベニューにはつながる仕組みが生み出せれば、何か非常に力になるような気がいたしました。

今日も本当に活発に多方面のご議論をいただいて、大変参考になり、有益であったと存じます。それでは、今日頂戴した意見はもちろん取りまとめに向けて活用させていただくこととなりますが、事務局から連絡事項をお願いいたします。

【坂本課長補佐】事務局でございます。本日はありがとうございます。

次回の部会の予定についてお知らせさせていただきます。第3回の会合は、お知らせさせていただいておりますとおり、来週の火曜日、1月22日13時から15時の時間で、現在調整をさせていただいております。議題につきましては、今回に引き続きまして、地域ICTクラブに関するプレゼンテーション、そして、デジタル活用支援員の仕組みにかかる中間取りまとめの発表を予定しております。第4回以降の議事等に固まりましたら、またメールでご連絡させていただきます。

以上